

のだが、このような真冬の夜間作業は随分こたえた。一番長い間伐採をやったが、この作業は危険性もあった。次第に作業場が遠くなるので、力もない上にソ連製の大きな重い靴を履かされ、重い足を引きずりながら歩いていった。

このような苦労の毎日もいつしか過ぎ、軍隊生活三年、シベリア抑留四年、満七年間、時には生死の境をさまよい、飢えと寒さと重労働にも耐えてナホトカで乗船、信洋丸にて昭和二十四年八月舞鶴へ上陸、無事帰ることのできたのが不思議なことのように思われる。

年男 七回迎え 今も尚 元気で居れし  
しあわせを 感謝に 燃えて  
今日も暮れゆく

## シベリア抑留記

愛媛県 池田 政治

大正十三年七月二日、現在の愛媛県喜多郡長浜町の農家の長男として生を受く。

当時、杉山にあった県立杉山農業学校を卒業して、農林省四国地方小麦育種試験地に勤務していたが、戦争もたけなわとなり、どうせ征くなら一日でも早くと思いい、適齢検査を待たずに現役志願兵として昭和十八年一月関東軍要員として丸亀の部隊に仮入隊し、旧満州国の宝東にあった歩兵第十二連隊（満州第九三六部隊）の歩兵砲中隊に入隊した。その後、昭和二十年四月に本土防衛のため部隊が四国に引き揚げた際、残務整理のため残されたのである。

幹部候補生として当時牡丹江の石頭にあった関東軍予備士官学校に派遣を命ぜられたのであるが、昭和二十年八月九日ソ軍の越境と同時に戦闘状態となり、磨

刀石、愛河、掖河付近でソ連戦車部隊と交戦し、彼我共に多大な被害を出したが、混乱の中で戦争終結を知らされたのは八月末頃、鏡泊湖近くの山中であつたと思う。当初は開拓団の人の情報により停戦協定が結ばれたということであつたが、その後情報が入るにつれて最終的には無条件降伏となり、敦化の飛行場近くに集結した。大分寒くなつた十月頃、牡丹江まで行軍し、ウラジオストックから帰還するということで貨車に乗り込んだのである。綏芬河を過ぎてソ連領内に入ると太陽が左に沈み、貨車は北へ北へと走っておることを知り、初めて騙されていたことを知つたのであつた。貨車はハバロフスクで止まり、雪の中を半日くらい走つたであらうか、コムソモリスクよりさらに北上して原始林の中にあつた丸太小屋に入れられたのである。以前囚人がいた所であらう、部屋の中にはソ連特有の鉄製の四角い箱を伏せたようなベーチカが据えてあつた。場所は、鉄道路盤工事の最先端の、原始林の伐採とその用材を利用した製材工場のものであつた。十月末ともなればシベリアでは雪一色で、昼でもな

お零下で、暖房なしでは夜も眠れず、周囲の山から枯れた倒木を運んで来て、鋸も斧もないので四メートルもある電柱のような丸太をそのままベーチカの焚口に入れると部屋のドアが閉まらず、不寝番が火を焚いて短くなつてからドアを閉めるのだが、一本の薪が翌朝まで残ることもあつた。夜の照明は手製の石油ランプで、十時の消燈でランプを消すと柱や板の割れ目から南京虫が出て来て頸から血を吸われ、また襦袢（シャツ）の縫い目には虱がわいて血を吸われて悩んだのもこの頃であつた。

衣類も当時はまだ夏の襦袢袴下に夏衣袴のまま、上にソ連製の綿入りの上衣を来て、靴は編上靴の代わりにワールンキというフェルト製の長靴と手には作業用の手套を支給してくれたが、帽子は略帽のままでも耳の凍傷が心配であつた。

人間の生きる基本的条件の衣食住の中でも食は最悪の条件であつた。当時は食事といつても、岩塩を溶かした塩水の中に満州からもつて来た緑豆（緑色のアズキ）が二、三十粒入つたものを、飯盒の蓋一杯が一食

で、空腹のために夜も眠れない日が続き、お互いに交わす話題は故郷の白慢料理や食べ物に関する話ばかりで、もし帰れたら米の飯を腹いっぱい食べることを話し、夢見て、栄養失調のために次から次へと斃れていったのだった。

当時我々に支給された糧秣と言っても、岩塩や緑豆はすべて満州から持って行ったもので、用材運搬の櫓を引かしていた馬も馬糧もすべて満州から持って来たものばかりであった。今のうちに何とかしなければこのままでは生きることが難しいと思ひ、山の中に入っても雪一色で食べられるようなものは何一つない。白樺の古木の枝から垂れている髪の毛のような苔があったので大事に持ち帰り、雪を溶かしてペーチカの上で煮沸してみたが、いくら煮ても食べられるようにはならなかった。ただ、作業の行き帰りにソ連兵の糧秣であらう運搬中のトラックからこぼれて真っ白に霜が降ったようになってくる馬鈴薯を見つけると、皆競争で拾って持ち帰り、ペーチカの中で焼いて食べた時のうまかった味は今でも忘れられない。しかし時には馬糞

が凍って霜の粉がふいているのを間違えて持ち帰り、ペーチカで焼いているうちにシュューと音を立てて解けてしまうのもあった。今思い出しても笑うに笑えない思い出である。

また、夜の炊事場から受領して帰る小隊ごとの飯あげの隊列に、突然暗闇の中から現れて、両手で抱えている食事の入った木の樽の中に飯盒を突っ込みすくって暗闇の中に逃げてゆく者も現れたが、樽を抱えている者は足元は滑るし樽を置くこともできず、あれよあれよと見ているよりなす術がなかったのも笑い話のような出来事であった。日本人同士でこのようなことがあったのも事実で、「食足りて礼節を知る」ということを身をもって体験することができた。

このような時に、折しもソ連側の要請で、用材運搬の櫓を引く馬を扱う経験者は申し出るようにと通訳を通じて連絡があったので、私は連隊砲中隊で馬の経験があったので早速申し出た。馬を扱えば既には必ず馬糧がある筈だ、馬糧は必ず人間の糧秣にもなる筈だ。馬が十頭くらいいるので要員は十二人くらいだったと

思う。早速翌朝から厩に行ってみると、高粱、玉蜀黍、燕麦、大豆粕、岩塩等山のように積まれており、これらはすべて満州から持ち込まれたものばかりだった。厩の作業は、作業開始の八時より一時間早く出て馬の水飼いや餌付けを済ませておかねばならず、また作業が終わってからも馬の水飼いや、餌付けをするので他の作業よりは作業時間が長かったが、馬糧が食べられることを考えると苦にならなかった。毎日作業が終わってから高粱を搗いて煮て食べたり、豆粕を焼いて食べるのが楽しみで、またこれによって栄養の補給ができたのであった。

入ソした年（昭和二十年）の年末頃だったと思う。気温は毎日零下三十度、四十度と続いていたが、ある日、馬一頭が病気のため急死したことがあった。早速ソ連の獣医が来て白樺林の雪の中で解剖し死因を調べたが、別に故意に殺したような形跡もなかった。獣医は我々に枯木を集めるよう指示し、解剖した馬の上の枯木を山のように積み上げて火を付けて、夕方になつたので焼いておくように指示して帰って行った。そ

の時、誰言うともなく「火を消せ」と言つて、馬の上で燃え盛る火を皆で消してしまつたのである。そしてこの馬肉を食べようということになり、タポール（斧）やビヤ樽の鉄の輪を切つて作つた即製のナイフで、頭や足、内臓を別々にして、雪の中に分散して埋めて目印をしておけば、シベリアでは四月の雪解けまでは凍結して大丈夫であつたので、それからは毎晩点呼が終わると厩に集まって、雪の中から馬肉を掘り出して馬糧の岩塩を砕いて塩焼きにして食べるのが楽しみで、結局一カ月程の間に十人ばかりで馬一頭分を内臓に至るまで全部食べてしまつたのであるが、これが初めてのシベリアの嚴冬を乗り切る栄養面での一助になつたのではないかと思う。

シベリアの春は極めて短く、雪が解ければ一週間くらいで夏になってしまうが、また同時に一斉に春の花が咲き、ワラビやタンポポの葉は絶好の食料となり、リスやヘビも貴重な蛋白質源であつた。少ないながらも三〇〇グラムくらいの黒パンを支給し始めたのは入ソ一年以上も経過してからで、それまでは人間の生きる

条件としての衣食住は最低であり、中でも食糧の面においては生死の限界であった。

その後二年目に入ってから身体検査があり、ドクトル（軍医）が尻の皮を引っ張って尻の肉付きによって一級、二級、三級、オカ（OK）の四段階に分類し、私はOKとして虚弱者だけの収容所に転属させられた。身体検査といっても聴診器も血圧計もなく、ただ肉体労働に耐え得るかどうかが、労役が目的の分類検査であった。OK収容所で約三カ月くらい冬の間を過ごせたのは幸いであったが、春になって体調も回復したので作業隊に転属することになり、私一人だけコルホーズ（集団農場）に送られた。恐らく前歴調査の時、農業試験場勤務と言っていたので農場勤務になったのだと思うが、一番困ったのは言葉がわからず、ジュエスターで示したり絵に書いて表したりして、セメント袋を切つてノートを作り一生懸命ロシア語を覚えたのもこの時期であった。

一年くらいしてまた転属となり、今度は鉄道の路盤工事掘削作業現場に送られたが、転属の度にどこへ行

くとも示されず、トラックに密閉されて行くだけで、一時期はもう帰れることはないかと思うようになっていた。そして最後にはコムソモリスク市の郊外で住宅の建築関連工事に従事させられたが、昭和二十四年七月にハバロフスクから貨車に詰め込まれて初めてダモイ（帰還）列車であることを知り、ナホトカ港に着いてやっと帰れることが確認できたのである。

そして八月初めに復員船明優丸で舞鶴港に上陸することができ、夢にまで見た我が家に辿り着くことができたのは昭和二十四年の八月十一日であった。

思い起こせば六年前、この田舎駅を出発するとき、村長をはじめ各界の有志や国防婦人会は勿論、小学校の全校生徒に小旗を振って送られた。この駅頭に迎えてくれたのは、村役場の戸籍係一人と部落の近所の人四、五人であった。

なお、戦後「岸壁の母」のモデルとして歌われた端野いせさんの待っていた端野新二君は、満州石頭の予備士官学校時代、連隊砲中隊（六中隊）の同じ中隊で

訓練した同期生で、昭和五十二年に読売グラウンドで第五回同期会をやった時、端野いせさんと歌手の菊地章子さんを招待して慰労し励ましたことがあり、それから母いせさんとは文のやりとりや電話も時々頂いたが、昭和五十六年に亡くなるまで新二君は生きていると信じているようであった。しかし新二君は昭和二十年八月十三日の磨刀石の戦闘で亡くなったのであり、中国での生存説が一時あったが、真実ではなく、勿論シベリアにも行ってはいなかったのである。

## シベリア抑留記

愛媛県 中泉 正一

生年月日 大正十二年一月三日

出生地 京都府亀岡市

職歴 満州開拓青年義勇隊 大日本セロファン

株式会社 関電興業株式会社総務部

軍歴 昭和十八年満州黒河にて甲種合格

### 終戦

昭和十九年二月二十五日ハルビン三七九部隊（近衛山砲二八連隊）に入隊 連隊指揮班

### 抑留まで

昭和二十年八月十八日延吉南三十キロ地点にて終戦  
延吉旧一三二八部隊跡に集結、一大隊三〇〇人編成。九月中頃移動開始、日本に帰る名目で満ソ国境に行軍する。途中人馬の屍体を見て手を合わす。男装の日本婦人に会う、散切り頭の汚れた顔がいたましい。三日くらいで国境に到着、シベリア鉄道の貨車に乗せられて、列車の進行方向に気付き騒いだが後の祭りであった。コムソモリスクに着き、そこからトラックで四十キロほど離れた收容所に入った。

### 抑留地

第一一一、一一二、一一三分所

### 作業の種類

伐採、運搬、積込み、最後に街に出て建築